

● 四 国

岸 啓 子

四国唯一のプロオーケストラ瀬戸フィルは、国際ピアノコンクールのサポートに主軸を置いた昨年とは対照的に、管弦打楽器それぞれに見せ場を持ちオケの魅力が堪能できるプログラムを定期演奏会で熟演しファンを満足させた(第30回ヴェルディ：レクイエム 指揮：N.ビジャヤ sop.藤谷 alt.山下 ten.大川 bas.島山 第31回～シネマティックセレクション～コルンゴルド：ヴァイオリン協奏曲、ジョン・ウィリアムズ：スターウォーズ組曲他 指揮：松岡究 vl.佐藤まどか)。これらのコンサートにはプレトークイベントやホールロビーのウェルカムコンサートを配し、瀬戸フィルメイトのシカコンサートには関連曲を組み込み、FM香川ゴーシュの部屋での宣伝も怠りなく、と幾重にも網目を張り巡らして演奏会を盛り上げた。演奏の質の高さを追求する一方で、草の根的な活動にも手を抜かないという両面作戦が瀬戸フィルを四国における唯一無比の存在に押し上げている。地域(まんのう町森のコンサート)、行政(こどもの日のコンサート、デリバリーアーツ)、教育(高松市学校巡回音楽教室)、丸亀商店街(街クラシック)や美術館などと連携しての活動もまた市民の大いなる支持を集めている。

愛媛交響楽団第46回定期演は(指揮：上野正博 bar.宮本益光)宮本氏が好演、第47回(指揮：森口真司 fl.中村めぐみ)はマーラーの交響曲「巨人」に挑戦した。徳島交響楽団ニューイヤーコンサートは(指揮：井村誠貴 バンドネオン：小松亮太)ピアノソラヤガルデル等のタンゴの名曲を取り上げ、スプリングコンサートは多彩な室内楽を、第48回定期(指揮：井崎正浩 vn.松田理奈)はロマン派の大作を描えた。高知交響楽団第162回定期(指揮：萩原勇一 vn.川村陽華)はチャイコフスキー：ヴァイオリン協奏曲、第163回(指揮：佐々木新平)はショスタコーヴィッチ：交響曲第5番を取り上げ、25周年を迎えた四万十川国際音楽祭はメインの中村交響楽団第87回定期with山下洋輔を中心に県外からも聴衆を集めて盛り上がった。高松交響楽団は昨年の高松国際ピアノコンクール入賞者と協演した(第121回～機知と色彩 魅惑のフランス音楽～指揮：松下京介 pf.伏木唯(3位)、第122回～近代ロシア音楽の饗宴～指揮：田久保裕一 pf.G.キトキン)。

声楽は第45回四国二期会オペラ公演《椿姫》(國方里佳 若井健司 長船伸夫他ダブルキャスト 指揮：守山俊吾 演出：中村敬一)がベテラン、若手ともに安定した実力を見せて秀逸。愛媛支部第36回公演～さあ！オペラの扉を開けよう～はコシファン・トゥッテ等のアンサンブルを特集、高知支部は《椿姫》《ボエーム》《電話》のヒロインを対比させつつ演奏し、オペラえひめ(第12回定期 指揮：守山俊吾)はストーリー解説を交えてメンデルスゾーンの劇音楽《夏の夜の夢》抄演とオペレッタの人気曲で会場を魅了した。

伝統ある松山パッサ合唱団は安定の歩みを示し(49回定期 指揮：橋本眞行 sop.藤井 alt.高橋 ten.田中 bas.玉山 fl.高市 b.c.大澤)、発展目覚しい高知パッサカンタータフェライン(第22回 指揮とbs.小原浄二)は東京公演を計画している。かがわ古楽アンサンブルは10周年記念公演「コーヒーなしじゃやっ

ていけない」で存在感を高め、第3回たかまつ国際古楽祭「～恋する古楽～」も(次回からせとうち古楽祭と改称)発展中である。コレギウム・ムジク高松は(第23回 指揮：大山晃 tn.若井健司他)ベートーヴェン若書きのピアノ協奏曲Wo04を四国初演した。なお香川では高松ベートーヴェン記念祭「ベートーヴェンへの道」も早々と開かれている。

印象に残ったのものとしては愛媛初の4台の歴史カル楽器を並べての「武久源造 パッサ鍵盤音楽の多次元空間」、聖カタリナ大学公開講座「風琴(オルガン)の音に誘われて」がある。愛媛県民文化会館改修閉鎖をうけて重要文化財萬翠荘(松山市)にバンの笛、ハーブ、クラシックギター等の小ホールコンサートが集中、拠点化したことも今年の成果と言えそうだ。